

令和6年度 第4回宇治市部活動地域移行検討委員会会議録

会議名	令和6年度 第4回宇治市部活動地域移行検討委員会
日時	令和7年3月19日(水) 17時30分～19時30分
場所	宇治市生涯学習センター 2階 一般研修室
出席者	(委員) 長積委員長 林口副委員長 平田委員 木村委員 矢野委員 中西委員 青木委員 杉本委員 清水委員 須田委員 村上委員 (欠席) (事務局) 福井教育部長 川崎教育副部長 武田教育支援センター長 安留学校教育課長 福山生涯学習課長 天花寺学校教育副課長 葛山学校教育課総括指導主事兼教育指導係長 宮脇指導主事 吉田学校教育指導主事 脇坂産業観光部長 柏木産業観光副部長 岡部文化スポーツ課長 倉井文化スポーツ副課長兼文化係長 菅居文化スポーツ課スポーツ係長
配布資料	令和6年度第4回宇治市部活動地域移行検討委員会説明資料
1 開会 開会挨拶 (事務局) 2 報告及び協議事項 (1) 学校部活動の地域連携・地域移行に関するアンケートの結果報告 ・各種団体アンケート (2) 【仮称】宇治市 今後の学校部活動の在り方について (素案) (3) 令和7年度実践研究事業 (案) (4) 令和6年度宇治市部活動地域移行検討委員会の活動報告 (副委員長) 報告1の学校部活動の地域連携、地域移行に関するアンケート (各種団体向け) の結果について報告をお願いしたい。 (事務局) 学校部活動の地域連携・地域移行に関するアンケート (各種団体向け) の結果報告 (委員) 回答数がかなり少ない。回答されなかった理由があるのか。 (事務局) 回答されなかった理由等については把握ができていない。今回のアンケートで、最終と考えておらず、各種団体についてはさらに深掘りした内容でアンケートに御協力願いたい。 (副委員長) スポーツ系と文化系で、活動日も違うため受ける印象も違うように思う。参加が難しいと回答されているところは、我々も感じていた部分と同じである印象を受けた。 (委員) 文化団体の高齢化が進んでいるので、このような回答になっていると思う。既存の文化団体で受入れていくという方法だけではなく、別の形も考えないと、無理ではないか。音楽連盟の17団体のうち	

の14団体は合唱である。そこで中学生を受入れられるかという点と難しい。宇治市少年少女合唱団があるので、そちらへ行ってほしいが、最近の子どもは土日は空けておきたい傾向もあるようで、平日の夕方に行ける活動を提供できればよいと思った。

(委員)

所属人数は、スポーツだと17団体の合計の人数か。

(事務局)

所属人数は、この団体に参加されている方の合計になる。そのうち中学生が何人いるのかという数字を載せている。バレエについては、それぞれ別の2団体からの回答があり、1つ目の団体では、所属人数が50名に対して、うち中学生は11名、別のバレエの団体は、全体が35名でうち中学生が3名で、別団体となっている。

(委員)

剣道団体が5団体回答しているが、団体の合計人数は29人か。

(事務局)

5団体から回答があったうち、1団体が中学生の参加について参加可能と回答された。その団体の全体の数が29名となっている。また剣道の2団体が課題が解決すれば参加可能と回答頂いている。

(事務局)

宇治市少年少女合唱団は、小学生の2年生から受入れており、中学生も1年生になるときに入ることが可能である。いろいろな活動を掛け持ちしている合唱団の子どもがいるため、練習場所や、行きやすさから団員が増えていないところがある。これからも広報を行い、少しでも団員を増やしていきたいと考えており、中学生の受入れもやっていきたいと思っている。

(委員)

野球、サッカーは参加可能と答えられた団体はないのか。

(事務局)

軟式野球3団体、サッカー1団体の回答の内、中学生の受入れについて参加可能という回答はなかった。しかし、軟式野球のうち2団体については課題が解決すれば参加可能という回答を頂いている。

(委員)

部活動にバレエはあるのか。

(事務局)

部活動にはない。

(委員長)

宇治市の考えと、既存の団体が中学生と一緒に地域クラブを推進していくことに対する考えはまちまちだと思う。団体の多くの方々は高齢で、なかなか中学生の受入れができないというところがあり、多くの中学生が来て、一緒に活動するのは難しいと思う。活動を一緒にするかまでは分からないが、宇治市に限られる資源、場や時間を共有するなどいろいろな形があると思う。

宇治市でこれから地域展開していこうとする在り方を考えたときに、既存の団体にどのような形だと協力を得られるのか、どういうことだったら今までのスタイルから変えて活動を推進することができるのか、もう少し緩やかな形を理解してもらわないと現段階では中学生が自分たちのところに押し寄せてきたら困るというイメージだと思う。今後コーディネーターを配置することで、いろいろな団

体の方々にこの部活動地域展開を進めていく説明をしていく余地はあるように思う。

このデータを基に、課題を受け止め、理解をしてもらうことにエネルギーを注ぐべきだと思う。課題がクリアできればということを回答されているところは、どんな課題をクリアすることで、協力ができるのかという、現状を知ることができたというところにまず取り組む。単に受け入れが難しいというふうには考えなくてもいいのかなと思う。

(委員)

吹奏楽は一般の団体として行っているところは少ないという実感がある。学校の部活動としては行いやすいが、場所や楽器の問題も含めると、単純に地域の団体に受入れてもらうのは難しく、別の団体を立ち上げるぐらいの考え方がないと難しいと思う。

(委員)

宇治中学校では、定期的に在校生の発表会、OBの発表会をしていて、その中で合同に演奏するというものもしている。学校ごとの活動を調べるとそれぞれの学校がどのような形で行っているかがわかると思う。茶道についても、学校ごとに調べると、指導者の数がわかると思う。

(委員)

吹奏楽はなかなか難しい点がどの地域にもあると言われている。他地域の実例からすると吹奏楽部の場合は基本的に、今の学校を拠点にしながら活動していくスタイルが多い。ある自治体では一堂に会し、有名な指導ができる方が来られて、合奏だけ楽しむのではなく基礎練習とか楽器の手入れからされており、その中でお互い刺激を得るということだった。場所の移動だけでなく、楽器の移動があるため、拠点は学校をベースにしつつ、交流したりオンラインで指導されたりすることも取り入れられていたりすることがあるため、拠点をベースに、今ある場所のところでできることがあり、一律部活動を解体しなければならないということではないということも御理解頂ければよい。学校には学校で行うメリットもある。

(委員)

宇治市の中学校は吹奏楽の活動が非常に盛んだと認識していたが、一つの学校で活動できているところと、一つの学校だけでは合奏できないところを探るべき。合唱は本当に掘り起こさないと部活動が全くない。合唱をやりたいという子どもは宇治市少年少女合唱団に来ていればよいが、合唱をしたいと思いながら、何もしないという子どももいると思う。宇治市音楽連盟としては、若い人たちを掘り起こして、合唱活動ができるような場を何とかつくっていききたいと思う。

(委員)

他の自治体が活路を見いだそうとしているのは、歌うことそのものが好きな子どもたちを集めることだと感じている。既存のイメージを払拭することを考えておかないと、地域で行っている活動との融合も難しくなるし、地域の方々も中学生を巻き込んでいくときに、既存のイメージも大切にしつつ、中学生がなじみやすいことを行うのが、宇治市の文化そのものの活性化につながると思う。

(副委員長)

吹奏楽に限らず本当に部活動が維持していけるのかという状況が起こっている。合同で試合に出ることを引き続き行っているが、今後できるところから、拠点校をつくり、拠点校部活動を進めていくことを校長会の中で確認している。活動したいという子どもに不利益にならないように、その活動の場を用意するところからスタートしていくしかないと考えている。

(委員)

すでに活動されている団体、体育館やグラウンドを使用している団体も含めて、団体名を挙げる。それが表になれば子どもたちもそれを見て、実際に行ってみることができるのではないかな。それと同時に、学校の部活動ができない子どもたちをどうするのかを進めていかないと、一つの道だけでは厳しいと思う。

(委員)

中学生がやりたいのにできないものはどの種目なのかが気になる。中学生の気持ちが把握できていないため、子どもたちの意見をどう集約していくのか検討すべき。

(委員)

保護者の中では、今の部活動地域移行のイメージが全く湧いていない。部活動に入っている子どもが部活動に入りたくて入っているわけではないということもある。この部活動しかないからこの部にやむなく入るという子どもがたくさんいると思っている。ほかの学校に行くまでの体力と気力はなく、友達もいるという理由で部活動に入っている子がどれだけいるのかという疑問がある。中学生に本当は入れなかった部活、実際入った部活、実際には地域のスポーツ団体へ行った子どもというアンケートをとると、今の部活の人数とは差が出るのではないかな。その中で宇治市の部活動を子どもたち目線で考えることが大事ではないかな。

(委員)

文化系の部活動は本当に少ないという現状で、文化系の部活動を考えるときに、あまり受入れの場がないというのが現状だ。プログラミングとか料理の活動がもしあればやりたいという意見が出てるので、もっと幅広い文化体験ができる受け皿があれば、もっと子どもたちが参加できるのではないかな。

(事務局)

中学校1年生2年生を対象にとったアンケートでは今学校の部活動に89%の生徒が所属している。その中で、現在所属している部活動について、自分のやりたい部活動に所属していますかという質問に、していると回答したのが88%。残り約12%が1番やりたいものではないが、中学校にある部活動の中で興味あるものを選んで入ったと回答をしている。

(委員長)

報告2の【仮称】宇治市 今後の学校部活動の在り方について(素案)の説明をお願いしたい。

(事務局)

【仮称】宇治市 今後の学校部活動の在り方について(素案)の報告

(委員長)

宇治市の場合は、拠点校とか合同部活動も維持しつつ、主眼は子どもたちの活動をできる限り保障することを最優先にしながら、場や種目、教える人、活動のスタイルを徐々に広げていくことをベースにしていくことになる。

現状の部活動をできる限り保障することを優先しながら、新しいことにチャレンジするところがポイントだと思う。また、いきなり運営の母体を地域に持っていくのは難しいため、行政もコミットしながら学校と地域の団体と、そして家庭を融合する形を徐々に模索していく。一旦は行政もコミットしながら、融合を図っていくところの手だてを講じていくというのがポイントだと思う。

休日からのスタートにならざるを得ない難しさもあるが、部活動を保障することを最優先する形の提案だ。一方でドラスティックな改革ではないため、見え方として何が変わるのかというと難しい部分もある。今後サークルレベルの方々と場や活動をともにすることも考えると、団体とかサークルの洗い出しもしていく必要がある。

(委員)

拠点校での活動として自分の学校に部活動がなく、別の学校の部活動に行っている子どももいるか。

(事務局)

いない。

(委員)

自分の学校に部活がなく、スポーツチームに行っている子どももいるが、拠点校方式になったときに、どのぐらいそちらを選択できるのだろうかと思っている。人数が少ないからクラブチームに行く、そもそも部活がないからクラブチームに行く子どもがいると思うが、部活に行くのかそれとも最初から地域に行くタイプなのかというのはどういう意味があるのだろうかと考えていた。最終的に、どのチームに行っているかが、部活動の地域移行につながっていくと考えていた。

(事務局)

今の既存のクラブチームと、今後展開していく地域クラブの違いを持たせる必要がある。既にクラブチームがあり、そこで活動したいと思う子どもたちは継続して、その団体での活動になる。そこにも行くことが難しい、やりたいことがない子どもたち、やりたいと思ってチームスポーツを選択したけれども、人数の関係でなかなかチームが組めないという子どもたちに、その活動の場所を新たに提供するというイメージを持ってもらえるとよい。

(委員長)

拠点校や合同でやっているところも、その近隣にあるものがベースになって活動が保障されていくということになる。新しい活動は地域のサークルとうまく連携を図っていきながらその受け皿をつくっていく。最優先は、それぞれの部活動の保障をしながら、子どもたちの活動を行っていく。

これは土日も、学校管理下の活動として一定保障する形でやるのか。

(事務局)

管理は学校部活動とは別の形で、地域での活動を考えている。

(委員)

地域クラブのメニューはばらばらにするのか、おおむね統一した感じでメニューをつくるのか。

(事務局)

地域クラブの活動内容は、当然異なってくることが考えられる。

(委員)

自分の家から近いクラブだけでなく、離れているが面白いメニューがあるクラブに行くというのも可能か。

(事務局)

可能である。

(委員長)

土日の難しさがあるのは、新しい活動機会を土日に開いても、平日の部活動を優先せざるを得なく

なると、土日の活動が軽視されたりとか、人が集まらなくなったりすることがある。大会や試合がないと、土日の部活動をやめる子どももいる。平日の部活動で試合があると土日の別の活動に行かないというジレンマが起きている。やりたいことがあるが部活動を優先しなければならないという考えがあれば、改革をして手を差し伸べるが実はそちらに行けないとなると、部活動に行っていない、10%強ぐらいの子どもがターゲットになるということも考えていかなければならない。

(委員)

吹奏楽の立場で考えると、場所の確保の視点から学校が活動場所になるのが1番よい。指導者の確保に本当に苦勞する。生徒も顧問も、ウィンウィンの関係になるようにしていくのが賢明だ。いろいろな方法を検討しながらみんなが幸せに活動できるような方向が1番よい。

(委員長)

指導者の確保や指導者の洗い出しなど検討されていることはあるか。

(事務局)

検討できていない。

(委員長)

その点も考えていかなければならない。

(委員)

本校では教員が2人顧問という形だが、2人とも指導できない。部活動指導員の方はプロ意識を持って指導してくださり、子どもたちも上達して楽しいと言っている。一方で部活動指導員の方もどこまで指導してよいかというジレンマがある。先生が見ておかないと心配だという声があるので顧問もついている。ただ部活動指導員をもっと活用できればと思っている。部活動指導をやりたい先生もたくさんいるし、部活動指導をやりたい方もいる。部活動指導員に任せたらいいと思うが、その位置づけが中途半端になっている。既存の部活動で先生方の負担を減らすのであれば、単純に部活動指導員の方で、プロ意識を持った方が入って任せてしまいたいという思いがある。宇治市として部活動指導員についてどのような方向性になっていくのか。

(事務局)

部活動指導員の位置付けについて、顧問として任用されているため部活動指導員1名で部活動指導を行っても問題ない。一方現場としては教員ではない方が1人で指導されるというところに踏み出せない部分もある。顧問、管理職、部活動指導員の連携が重要になる。責任が伴うため、それを気にする部活動指導員もおられるのが現状だ。部活動指導員は、国や府からの補助を受けながら活動しているため、数を増やしていくことができればよいが、金銭的な部分や人材的な部分での難しさがある。

また、部活動指導員はあくまで学校部活動の顧問としての活動になるため、続ける先に地域展開が見えてこない。活用していくことが、地域の方に活動をお願いしていく一つの道筋として活用できるのではないかと考えている。

(副委員長)

本校には、たくさんの部活動指導員に来ていただいて、引率も認めている。ただ活動内容として、専門的な技術面を教えに来ていただくというのが主になっている。部活動の運営はそれだけではなく、試合の登録する作業や、事務的なものもある。また、日常の子どもたちとのやりとりも生徒指導上、非常に大きいものがあるため、そういった部分は教員が担っており、顧問と一緒にチームをまとめて

いるというのが現状だ。人材に関しても現状はその部活を指導しておられた元顧問の先生がほとんどだ。

（委員長）

学校を中心としながら活動を地域展開していこうとするときに、独自の予算を確保して部活動指導員の予算化をすることを見据えておかないと、形が変わっていないのに受益者負担というのは難しくなる。受益者負担額は、ドラスティックに仕組みが変わったり、進化をしたりしているところを見せない限りは、保護者の方々の理解も得られない。そのため、今の活動を一定保障することをベースにしていった地域展開を考えていく必要がある。

（委員）

保護者がただ見守るだけの部活動もある。子どもたちが強くなりたいと思って、練習を自分たちで考えてやっていく。保護者が地域の部活動として見守り、保護者が応援とか支援型でしているクラブも存在する。また、その部活をやっていた人が指導に来るという形もある。文化系になると中学生と一緒に活動するという形もある。

拠点校のところに部活動指導員を配置し、週末は受益者負担ということを保護者に説明をしていく。そうすれば全国大会までつながる大会には出られるし、うまくいいところ取りをしてもよい。

また、宇治市として何かイベントをして、子どもたちがいろいろなことが体験できて、これからやってみたいと思うものを見つけるようなものがあれば、そういう団体に入りたいということになるのではないか。

（委員）

数年前から 10 名ぐらいのバイオリン中心のオーケストラで小学校で演奏することを行っている。バイオリンに子どもたちが触れ、実際に音を鳴らし、演奏に子どもたちが合わせて演奏すると、とても子どもたちが喜ぶ。より楽器に親しむというようなことは文化系でもできるのかなというような気がする。

（委員長）

イベントは、他の自治体でも体験会みたいなことを行われていることがある。部活動に入ってくる前の小学生を対象にして、体験会みたいなものを行い、中学生になると土日にはこんなことを行っていて、中学校の平日部活はこんなことを行っているという体験会を行っていることもある。ただ、体験会ではできる限り直前がよいと思っており、時期は考えなければいけない。時期だけでなく、クラブチームに入っていない子どもたちには早い段階から、そういう機会をつくることは重要だと思う。

宇治市が目指す形に幾つかのステップがあるとするならば、そのステップの中でいいところ取りができるところと、すみ分けをしなければいけないところを明確にし、どんなパターンで活動が提供できるのか、どのようなパターンで運営ができるのかという、活動の多様性と、それを担う団体の多様性は、想定されるパターンをつくっておいてもよい。もう少し具体的にどんなパターンで活動を提供するか、想定されることを幾つか具体的なイメージがあると協力を得られるところに具体的な提案ができると思う。

（委員）

体験会については既に 2 回行っている。黄檗体育館と西宇治公園で、様々な種目で裾野を広げるために行っている。気になるのが休日の学校で行っている部活動と、平日行っている部活動とのつなが

りをどういうふうに考えていくのかということだ。平日に練習をして、土日のどちらかで試合をするというのが一般的な活動になるが、指導者が変わることで、連携がとれるのかが気になる。

(事務局)

土日部活動は行わないというきっかけがあれば、地域クラブにも移りやすいと思う。また、地域クラブに参加する子どもを宇治市全体に募集をかけるのか、もしくはある中学校ブロックの生徒対象に声かけをするのかでも方法は変わってくるが、具体的なイメージは持っていない。

(委員長)

平日と休日の子どもたちの参画パターンのイメージを子どもたち自身もできなければいけないし、我々もそうだ。イベントの中で、体験からクラブへの紹介までを行っているのか。

(委員)

している。

(委員長)

そういう形が必要である。中学校でも、この中学校ではこんなことができ、土日はこれができるということを子どもたちには情報提供していくことが大切だ。学校の部活動だけでなく、地域のクラブも体験から楽しさだけではなく、その先のつながりをプロデュースする形でイベントを考えられるとよい。

(委員)

中学生にも、平日は中学校の部活に入っているが、週末は違う地域クラブでの活動を行っている子どももいる。平日行っている種目と週末行っている種目が一緒の場合もあれば違う場合も当然ある。違う場合は、週末に部活動の大会があっても、違う種目の大会があればそちらに出る。部活動を選ぶときに、週末の試合に出ないから入れないということもなく、どちらの大会に出るのかという選択は子どもにあると判断している。

(委員長)

中学校の部活動と地域クラブの併合したときには、子供の奪い合いみたいにならないかも危惧されている。実質的に土日と、平日が違う活動することで週7回活動を行う子どもが出てくることもあるためこちらも危惧するべきだと。もう少し具体的な活動イメージとかパターンとか、どこまでが管理下で行うか、活動のコントロールや指導者の確保を実現するためにはどんなハードルを越えていかなければいけないかを考えた上で、休日と平日を切り分けたことによって生じる問題から部活動の在り方をブラッシュアップするという形にしてもらいたい。

次に実践研究事業について説明をお願いしたい。

(事務局)

報告3 令和7年度実践研究事業(案)について報告

(委員長)

生徒数の減少など部活動数の見直しが必要になっている学校というのは具体的に決まっているところはあるか。

(事務局)

市内10中学校あるが、いずれの学校も今後部活動数の見直しが必要になってくるところだ。

(委員長)

バレーボール、ソフトテニス、卓球は現在の平日の活動から、何を検証していくのか。

(事務局)

平日行っている学校部活動とは別の活動にはなるため、連絡体制や、活動場所をどのように確保していくのかを検証していきたい。

(委員)

文化系は入れなくてよいのか。また実践研究事業であれば、地域人材を活用するところと、教員の兼職兼業をしたときにどういう課題があるのかを試みるというのはどうか。また、参加生徒が所属する学校部活動はこれまでの活動を行うというのは、ソフトボールだと、行かない子どもがいてもよいのか。加えてソフトボールをやりたかったが学校に部活動がないから参加したいという形もよいのか。

(事務局)

ソフトボールで実践研究事業で行う際には、学校部活動としての活動は続けていく中で、新たに地域クラブとしての活動をつくっていききたい。参加生徒の募集をかける範囲については、現段階で、ソフトボール部に入部している生徒限定にすることは考えておらず、裾野を広げて募集をかけることも考えている。

(委員長)

日常の活動とは異なる部分、新たな取組を検証するべきだ。子どもたちに新しい機会が開いてることが伝えられないと、何を検証するのかが分からなくなる。単独で行う形と合同で行う形で、平日の活動とどこに変化があったかを子どもたちの側と運営サイドの側で検証できるような形が良い。

(事務局)

文化系の活動も検討したが、現状では用具の関係でハードルが高いと考えている。

(委員長)

今まで学校には提供してなかったものを行ったときに生徒が来るかという検証があった方がよい。土日は新しいスタイルであることを打ち出すために、新しい気づきとか、今までにない、何が行えるかを検証してほしい。検証であるので、目指そうとしているところにたどり着くときに、やってみたい、試してみたいことが検証されるべきだ。地域展開を行っているところに、どの生徒が来てもよいという見せ方をしないといけない。

(委員)

各自治体の例をもとに研究を行うのか、検討委員会を踏まえて、市独自でスケジュールを立てて行っていくのか。すでに取り組んでいる自治体の成功例をもとにしてほしいという思いもある。子どもたちが何を望んでいるかを見ると、空手や習字、料理などにも視点を当てるべきだと感じる。検証するのであれば、今部活動がないものや、子どもたちの生涯スポーツの視点で考えると、そういった方向を検討するべきではないか。

(事務局)

宇治市として何ができるかと考えたときに、他の自治体と同じ形で行っているわけではない。また、学校部活動にない新たな種目に取り組む実証を行うことも、検討材料の一つには挙がってはいたが、実際開いてみたもののそこに子どもたちが集まらないことを懸念した。今活動している子たちに目を向けたときに、また指導者の確保という点から種目を選んでいる。

(委員長)

バレーボール、ソフトボール、卓球は何を検証するのかが分かりづらい。これまで外部の指導者に任せていなかったことを任せてみたらどうなるのかを検証してもよいのではないか。

(事務局)

兼業兼職とかあるいは新たなスポーツにターゲットあてて募集するとか様々な視点がある。全て実証ができればいいが、全てを次年度実践研究していくことは難しい。事務局としては、この地域人材の方を活用するパターンで、どういう課題が出てくるかというところに焦点を当てている。いろいろなところから子どもたちが集まり、指導者が違い、運営母体が違うというところで検証が行えるような形にしていかなければならないと考えている。また、地域人材が、指導者として、地域のクラブとしての活動を行うということが検証できればよい。地域クラブで活動したいという教員もいるかもしれないが、検証する際に、学校から切離した形で活動にすることで、課題を検証していきたい。

(委員長)

全てのことが検証できるわけではないので、次年度できることとさらに次にできることを考えられればよい。地域人材を活用するところは、その活動をプロデュースするのが地域人材の方が主体の場合にどんな組織体制、どんな運営体制となるのか検証されるとよい。子どもたちに機会を提供するにあたり、平日その部活動に参加している子どもだけを対象にしないのであれば、今参加していない子どもたちが参画しやすいようなメッセージを考えてもらいたい。地域人材を活用して、活動をプロデュースをするところをまず試してやるというのが主眼であるため、その部分で、次年度の実証事業を行い、今まで試してなかったところを検証していくのがよい。実証事業の時期が遅くなると、土日に新しい機会を提供すると言っても、その部活の活動が優先されたりするため、その辺りも考えられるとよい。

(委員)

予測を立てているのかどうかに疑問がある。これが例えば失敗した場合は今後どう向かうのか、今後地域に移行していくという流れの中で、予測と結果に違いが出た場合、今後どうしていくのかについて、移行していくということを前提に考えてほしい。

(委員長)

仮説を検証するところと、もしうまくいかなかったりするときのバックアップも考えられるとよい。指導については現在外部指導者で行っているところがあるため、指導以外の部分を検証してほしいと思う。

次に活動報告についてお願いしたい。

(事務局)

報告 4 令和 6 年度宇治市部活動地域移行検討委員会の活動報告

(委員長)

1 回目の検討委員会で令和 7 年度のゴール設定が分かるようにしてもらいたい。それに向かって 4 回の会議で何をするのか、少なからずここまでたどり着きたいということが分かるように第 1 回検討委員会で説明頂ければよい。

(委員)

実証事業は 9 月からということだが、7 月から地域の指導者を入れるということか。

(事務局)

実践研究事業に、地域クラブの指導者を入れて実施をしていきたいと思っている。令和7年度途中から地域クラブ活動指導者と入れているのはそういった意味合いがある。今回この実践研究事業について、検討委員会の中で方向性の理解を得た上で、さらに具体的な動きをとっていきたいと考えている。

（委員長）

思った通りのことがすぐにイメージできるわけではないが、一步一步進んでいければよい。次年度は、この部活動の在り方を充実させ、宇治市が目指す形をブラッシュアップし、実証事業を重ねたことを宇治市の部活動の在り方にも反映させていただきたいと思う。

3 閉会

閉会挨拶（事務局）